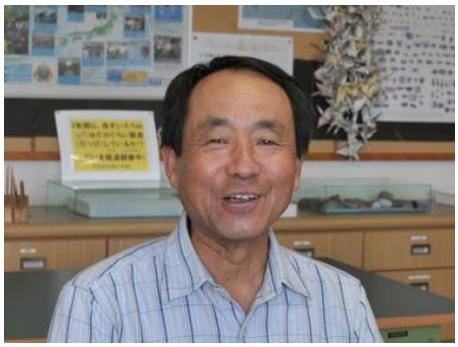
未来に繋ぐ　藤前干潟インタビュー②

# 坂野　一博さん

藤前干潟クリーン大作戦実行委員長
NPO 法人藤前干潟を守る会　理事



藤前干潟では、春と秋の一年に２回、市民 1,000 人以上が集まり干潟周辺のごみを回収する「クリーン大作戦」が行われています。初代実行委員長（尾張野鳥の会代表　浅沼氏）が一人で始められたこの活動は地域規模となり、２代目実行委員長である坂野一博さんに引き継がれました。実は、坂野さんは藤前干潟の保全に地元として大きく貢献された方であります。幼少の頃から、藤前地域を見続け、今もなお藤前地域を大切にされている坂野さんに、お話を伺いました。

■坂野さんのお生まれはどちらですか？

藤前干潟クリーン大作戦のメイン会場である中堤（導流堤）に行くときに、日の出橋（新川）か明徳橋（庄内川）を渡るんですけど、その日の出橋のすぐそばで昭和 26 年に生まれたんですよ。３～４歳くらいまではそこに住んでましてね。中堤には、今はもう無いんですけど、当時はまだ建物があったんですよ。父親が会社員で、矢作製鉄に勤めながら、船も持ってたから漁業もやって、さらに農業もやってたんです。要するに半農半漁とサラリーマンですね。父親は新川の小賀須（名古屋市港区）で、オゴノリをたくさん取ってきて干して、結構売ってたみたいですね。オゴノリっていうのは結構高値だったみたいで、うちの父親はそれなりに儲けは良かったって言ってました。

３～４歳以降は、多加良浦（名古屋市港区多加良浦町）にずっと住んでました。庄内川の左岸なんかでよく遊んでましたよ。今と同じように、ヨシがたくさん生えてましたね。昔は、多

藤前干潟周辺図

加良浦に海水浴場があったみたいですね。

23 歳のときに、藤前（名古屋市港区南陽町藤前）にある父親の実家の本家に来ましたね。それからずっとここに住んでいるんです。

■坂野さんが小さい頃、藤前干潟周辺に堤防はありましたか？

もちろん堤防はありました。伊勢湾台風（昭和 34 年９月 26 日）の前は、堤防はコンクリートじゃなかったです。

伊勢湾台風のときは、私は小学校３年生でした。その日は、夕方５時過ぎから風雨が強くなってきて、夜はますます強くなり、「堤防が切れた」っていう声が近所から聞こえてきたんです。今の宝神下水処理場（宝神水処理センター、名古屋市港区宝神四丁目）の辺りの堤防が切れたんですよ。そこから、うち（当時坂野さんが住んでいた多加良浦）の方にも水が来て、「大変だ」っていうことになったんです。当時通っていた高木小学校（名古屋市港区高木町）へ避難しないといかんということで、家の外へ出たんです。いったん家から学校へめがけて 100m か 200m 歩き出したんですが、そのときにはもう膝くらいまで水が来てました。人間って膝まで水が来ると歩けなくなるんですよ。それに、今は家がたくさんあるけど、当時はうちの周りも田んぼが多かったんです。田んぼは急に道路からがくんと落ち込むから、夜でそれが見えないから危なかったんですね。父親が、「これはもういかん」って言って、逆に家に避難しましたね。

実家には、当時、中二階っていう屋根裏の物置部屋があって、そこまで上がらないといかんということになったんです。父親も母親も、水がどんどん上がってくるなんて初めての経験だったんですね。父親が「これ以上水が来ると家が流されるで死ななあかん」って言ったときにはみんな泣いてました。自分も怖かったですね。ただ、それがある高さのところへ来たら水が上がるのが止まったんですよ。うちは最終的には床上 30cm くらいの浸水だったと思います。水が止まった時間はよく分からなかったけれど、電気も全然駄目で、夜で辺りは真っ暗ですよね。ただ、うちの屋根の瓦のところに明かり取りみたいのが付いてまして、若干の光は入ってました。

明くる日は台風が過ぎちゃったから快晴でしたね。船で高木小学校へ避難しましたよ。高木小学校には一週間くらいいたのかな。その後、自衛隊の船で県立の惟信（いしん）高校（名古屋市港区惟信町）へ行って、しばらくそこにいたんですけど、ぼくらも勉強しないといかんという話が出て、葵小学校（名古屋市東区葵）に一ヶ月くらい学校の先生も一緒に行って集団生活してましたね。疎開してたっていうのかな。それは楽しかったですね、小学生でしたからね。ただ、全然授業がついていけなくて、全然わからんかったですね。まあ、先生も「あんたらは可哀そうだでしょうがないわ」という感覚で、温かい目で見てくれてました。

私の父親は、船を漕げたので台風の後は毎日のように船で遺体回収に行ってました。浸

水から逃げた人の中には、家から道路に出たのはよかったけど、そこから田んぼとか用水に落ちて溺れたというのが結構あったんですね。

■伊勢湾台風後の庄内川の様子はどうでしたか？

庄内川は、私の記憶としては今よりもきれいでしたよね。いろんな企業からの排水が出てきたのは、昭和 50 年前後じゃないですかね。昭和 36～37 年はまだまだ水はきれいだったと思うなぁ。アオノリが取れたり、父親が獲った魚も平気で食べたりしてましたしね。まだオゴノリも取れていた。

小学校５～６年生の頃までは、父が船で今の庄内新川橋の下とかへ行くのに付いて行ってました。庄内新川橋の北っ側に、ヨシが島みたいになっていたとこがあったんで、そこでガサガサやったり、父親は投網で魚も獲ってましたね。今、藤前干潟クリーン大作戦の後に導流堤の先端で干潟観察会をやりますが、その導流堤の場所に、当時は４～５m の幅の切れ込みがあって、船で庄内川と新川の間を行き来できてたんですよ。今はその切れ込みに石が入っちゃっていて通れないですけど。父親は、あまり新川では魚を獲ることはやってなかったような気がします。それに庄内川の方はアオノリが多くて、私でもタモですくえるから、アオノリをすくって家に帰って干して、ごはんのおかずにしたりしました。藤前地区では海苔を取ってたと思いますよ。海苔の養殖をこの周辺でやっていたんでしょうね。というのも、藤前にある私の母親の実家が仕事として海苔すきをやってたんですよ。まず海苔を取ってきて、海苔は繊維が長いもんですから、ミンチみたいに繊維を砕いてましたね。それで紙すきみたいに海苔をすいてました。

昔は庄内新川橋はなかったので、多加良浦の家から自転車で日の出橋を通って堤防を通って藤前の母親の実家まで行ってましたね。いつも母親の実家からのおみやげはこの海苔だったですね。伊勢湾台風後、高潮防波堤を建設した関係で、この辺りの漁師さんは漁業権を放棄することになったみたいですね。それで、漁や海苔養殖ができんようになったので、その後、母親の実家はニワトリ経営に乗り出しましてね(笑)。でも、ニワトリも良し悪しで、ここらへん（藤前地区）は土地が低いので、よく水が来て、ニワトリが水没して死んじゃうんですよ。そういうのもあって、結局はそんなにニワトリの飼育は長くはやれなかったんですけどね。

藤前干潟を守る会の海苔すきイベント

いつかはこの藤前でも、また海苔が取れるようになったらいいなぁとは思っているんです。でも、まずアオノリが取れなきゃだめだとも思ってるんです。２～３年前に、犬飼さん（名古屋市の最後の漁師）に、藤前で再び海苔が養殖できるかどうか聞いたときは「そんなのあかんわ」と言われて終わりでした

けどね(笑)。何であかんのかわかんないんですけど、何でなんでしょうね。知多の方では今でも海苔を業としてやってるじゃないですか。だから、藤前干潟周辺でもどうなのかな、とも思うんですけどね。

今、藤前では、藤前干潟を守る会のイベントのときに海苔を三重から買ってきて、海苔すきをやっています。いつか、藤前干潟で海苔作り（養殖）から海苔すきプロジェクトみたいなのをやりたいなあ。

■藤前干潟にいる生き物で何の生き物が一番好きですか？

前に、自分を生き物（鳥）にたとえたら、あなたはなんですか？という質問をされたことがあって、私はウだと答えたんですね。なんでかっていうと、すぐ群れたがるからですね(笑)。

ウって黒くって大きな体していて格好良くはないんですけど、動きが素早くて、結構好きなんです。鵜飼のウだって、速いスピードで泳ぐアユをどうやって捕まえるんだろう？っていうくらい、水の中では速いじゃないですか。それと導流堤の鉄塔のところで平気で巣を作るしたたかさですかね。だからウが案外好きなんですよ。私も結構いろんな人と群れるのが好きなんですよ。

鉄塔で巣を作るカワウ

あと、コアジサシも好きですよ。あの鋭敏さは好きですね。以前、♪鳥くん（野鳥研究家・シンガーソングライター）が藤前活動センターに来たんですよ。彼は自分の本を出してて、その時にサイン会みたいに「好きな絵を言っていただければ書きます」、って言ってたので、その本にコアジサシの絵を書いてもらったかな。コアジサシは海面から５～６ｍ上を飛んでて、トーンと海に急降下して、小さなボラの赤ちゃんをパクーンといくじゃないですか。よく見えるなぁと思うし、飛び込んだ瞬間には水の中で見える姿が屈折しているじゃないですか。だから、コアジサシはえらい（すごい）なぁと思ってね。

コアジサシのダイビング

さっきのウだってすごいですもんね。たまに、藤前干潟でウナギの飲み込むシーンを見るんですよ。あれ見ててもね、私らだったらウナギ一匹も食べられないけど、彼ら平気で飲んじゃうでしょう。ウも集団で漁とかいろんなことやってますし。でも、竹生島（ちくぶしま）（琵琶湖に浮かぶ島）は、木がウの被害にあってるっていう話を船頭さんが言ってましたけどね。増えすぎてもいかんし、足らんでも困るし、やっぱ

ウナギを捕えたカワウ

りバランスなんですかね。

■藤前干潟のシンボルといえば、何だと思いますか？

藤前干潟のアナジャコ

アナジャコがシンボルだと思ってますね。ある意味じゃ藤前はアナジャコで助けられたのかな、という気がします。アナジャコは 2.5～2.6m の穴を掘るんですけど、最初、みんなそんなことは知らなかったんですよ。名古屋市のアセス（環境アセスメント）では、干潟の表層しか調べなかったから、深いところに住んでいるこのアナジャコをみつけることができなかった。表層だけの生き物の数字で干潟の重要性を判断したんですね。当時、藤前干潟を守る会で活動していた小鳶（こじま）さんが、このアナジャコの巣型を取って、これを名古屋市の松原市長（当時）に見せたんですね。この巣型を見たときのことを松原市長は回想として書物に書いてますよ。この巣型は公聴会のときにも、みんなに見てもらったんじゃなかったかな。このアナジャコの巣型で、干潟の深いところにもたくさんの生き物が住んでるっていうことを示すことができたんですね。

アナジャコの巣型

最近はアナジャコがたくさんいる藤前干潟の奥へは観察会などでも行くことがなくなり、あまりアナジャコの姿を藤前干潟で見てないのでさみしいですけどね。昔はもっと奥の方に行ってました。以前はもっと干潟もドロドロしてましたが、今はかなり固くなってますよね。昔ならちょっと干潟に立っただけでも、やばいやばいという感じで体が沈んでいったんです。今は、ずっと立っててもも沈んでいかないし、10 年前と今とではかなり泥の質が変わったんでしょうね。今の干潟は歩きやすくて良いかなと思うけど、逆にゴカイなどが全然いない。今年（平成 24 年）の６月８日に、私が受講している東海シニア自然学校の授業の一環で、干潟に入ったんです。４班に分かれて 30 人で干潟を掘ったんですが、ゴカイはいなかったですね。昔はスコップで掘ったら絶対にゴカイに当たるくらい、沢山いました。干潟が変わっちゃったような感じがします。

■藤前干潟の保全に関わられた経緯を教えてください。

私の息子（現在 31 歳）が小学生の時に「藤前鳥子ども団」というのがあったんですが、当時は中川区の小学校の龍頭（りゅうとう）先生という方が、「藤前鳥子ども団」をやってみえて、そこに

うちの息子が小学校５年生のときに参加したんです。「藤前鳥子ども団」の最初の活動は、藤前の海岸堤防の清掃だったんですよ。小学校５年の子供を清掃に行かして親が付いて行かないのもいかんやろ、と思い付いてったんです。そのときに藤前干潟を守る会の活動で、辻さん（藤前干潟を守る会名誉理事長）が堤防に来てたんでしょうね。たぶん龍頭先生から辻さんを紹介してもらったような気がします。それから辻さんを知るようになったと思います。

あの頃は、まだ藤前活動センターもないし、干潟に入っても干潟観察に必要な設備が現場にないっていう状態でしたね。守る会が観察会などの催し物をやるときには、お手洗いは業者からレンタルしてたんですけど、水道がなくて手足が洗えないじゃないですか。私が藤前に住んでたので、車で水を運んで行って、手や足洗い用の水を担ってました。そんな頃に守る会に入ってたのかな。まだ守る会は NPO じゃなかったから、会費がどうだとかそういう縛りが無かったもので、みんなが自由に参加してたっていう感じでしたね。

辻さんと一番関わりがあったのは、公聴会をやったときでしたね。公聴会っていうのは地元の人間が申請しなければいかんとかで、辻さんたちでは公聴会を要求する権利がないっていうことだったらしいんです。で、「あなたの名前がいるから」って辻さんがおっしゃって、私の名前で公聴会の開催要求をした記憶がありますね。

最初は私も干潟のことはわからないし、とりあえず公聴会の開催のお願いを出しときゃええわ、という感覚だったんです。けど、公聴会のときに、WWF とか東大の方とか、とにかくいろんな立派な人の名前が挙がってて、そのうちに自分も思いを言いたくなってきて。辻先生に、「自分にも言わして欲しい」と伝えました。

ただ、私は地元に住んでたということもあって、干潟の価値は案外見えないことが多いんですよ。当たり前の景色であり、当たり前のものだから。だから、そこは藤前干潟がとても重要なものだとは思わなかったのもあるんです。守る会で活動をしている間に、大事だということは少しずつ分かってきてたと思うけど、私は生き物が大事というよりも、むしろもうこれ以上そんな迷惑施設（ごみ処分場）を自分たちが住んでいる場所に持ってこないでよ、っていう思いが強かったですね。藤前にはごみ処分場はもういらない。藤前干潟の保全に関わっていた他のみなさんとは思いがちょっと違っていたという感じがしますね。

それと、当時はダイオキシンという言葉が世の中に蔓延してました。私たちは、ダイオキシンから子供を守るという会を地元で作ったんです。名古屋市の埋め立て計画では焼却場の灰を埋めるというのもあったんで、ダイオキシンにはすごく敏感だったというのもありました。今は新南陽工場だけがあ

平成 13 年頃の旧南陽工場（左手前）と新南陽工場（右奥）

るんですけど、当時は、その南側に赤と白色の煙突の旧南陽工場もあったんですよ。今の新南陽工場とダブルで動いてたんですよ。最初、名古屋市は旧南陽工場の使用を２年間延長したいということで、２年間並行運転をしていたんです。そのうちに名古屋市がさらに３年間延長してくれって言い出したもんで、それはないだろう、どっちかの工場を止めろ、という話が出たんです。それで、私たちは地元で「藤前を守る会」を作ったんです。メンバーは私の地域の同年代の者が多かった。南陽工場の並行運転は結局２年間で終了したんですけどね。この会を作って、藤前干潟の埋め立てに関しては、藤前自治会の住民投票を自分らで高校生以上の全ての人に投票権を与えるというのを作ってやったんです 。ちょうどその前に御嵩町（岐阜県可児郡）で産廃処分場建設に関する住民投票が行われて、反対という結果が出ていたんですよ。これで住民投票というものがあると知って、藤前でもやろう、ということになった。それで、藤前でも住民投票をして、藤前干潟の埋め立てに対して住民は反対ということになったんです。

当時、藤前の自治会には、100 軒弱の家が加入してました。自治会での意思表示では、一家を代表するお父さんが賛成なら、その家は賛ということになってしまいますが、その家にはお母さんもいるし、子供さんもいるし、孫もいるわけです。子供や孫は埋め立てに反対なんですね。それに、お父さん一人が自治会の会合に行ったときに、周りの人が賛成って言えば、そのお父さんも周りに合わせて賛成してしまう、というのもあって、自治会の中で反対意見は出にくかったんでしょう。でも、実際は、地元の人と話してると「あんなとこ（処分場）は造ったらあかんよね」、「そらそうだわ」っていう話を多くのみなさんがしてたのを感じてました。埋め立て反対の運動ができたのも、当時私は 47 歳で地元ではそれなりに若いほうでした。我々の世代が先輩に対して意見を少しずつでも言える時代になってきたからかもわからないですね。それと、多加良浦から藤前に来たというのもあって、地域でのしがらみは少なかったんでしょうね。だから、藤前の埋め立ての反対もしやすかった感じはありますね。私は藤前で育ってない者ですから、反対意見の発信がしやすかったと思います。

それから、当時世の中にはいろんな問題があって、中部電力の芦浜の原発（現三重県度会郡南伊勢町と大紀町にまたがる芦浜地区に原発の建設が計画されていたことがあった）の話もあったし、御嵩町の産廃処分場の問題もあったし、藤前は埋め立ての問題があったし、世の中が環境問題に関心を持ち始めた時代だったのかなぁっていう気がしますね。

藤前自治会内もいろいろありましたね。自治会の環境委員さんは地元のためになると思って名古屋市さんとの間を一所懸命調整しながら埋め立てると決めてきたことを、私のようなよそから来た者がひっくり返そうとするわけですから、彼らも立腹していたと思いますね。あの頃は、もし干潟を守れなかったら多分自分はつまはじきになるだろうな、という不安もありました。ただ、たまたま今年自治会長になった友人が、「ダイオキシンの勉強会で、辻さんが涙流して藤前を守らないといかんと訴えてた、その辻さんの涙を見て感銘した、だから俺も応援するんだ」、ということがありました。

実は、住民投票をやった後、前に進めなかった時期もあるんですよ。名古屋市さんはあくまでも自治会長さんが交渉対象で、私らのような一住民は交渉対象じゃないわけです。結果的に、住民投票をやった後、自治会長さんに名古屋市と埋め立ての話をもういっぺん白紙に戻してもらうためのアクションが必要だったんですね。それを自治会長さんに頼みに行きましたね。あと、役所にものを言うのにも、お願いするのにも文書がいるじゃないですか。自分が文書を作ったんですけど、ある方に文章を役所向けに直してもらったりして。直してもらった方には今も頭が上がらないんですけど(笑)。あの方にはすごく感謝しています。

ただ、地元は、名古屋市はごみ処分場が無くて、ごみがどんどんいっぱいになるから処分場も必要だし、どうしようもないということで藤前干潟の埋め立てを認めてたところもありました。昔から地元にいる人は伊勢湾台風を経験してみえて、藤前辺りでは 30 数人亡くなっていますから、私が住んでた実家（多加良浦）よりも被害がひどかったんです。多加良浦の実家は床上浸水くらいの被害でしたが、藤前はほとんど 2 階まで水が来た地域です。地元の人は今の堤防の前にさらに処分場ができれば、陸ができて海が遠くなるわけですから、そういう意味で藤前干潟の埋め立てを歓迎してたという現実もあったと思いますね。

しかし、私の家の敷地の下に既にごみが入ってて、これ以上ごみはいらんっていう思いでした。今の南陽工場が 850 億円の施設なんですけど、「850 億円の施設を名古屋市が藤前に建設して、そんな費用のかかった南陽工場の前にある堤防が切れるなんてことはありえないんだ」、と私は地元の人には言ってました。「そんな堤防が切れるとは、私は思っていない。その堤防の前に処分場を造ること自体おかしい」って言ったことがありますね。中には、芦浜の原発みたいに冷静に考えようっていうのか、YES か NO かじゃなくて、状況を様子見てればいいんじゃないかという意見も出たんです。でも、私は、「ここ（藤前）はもう埋まるかどうかの話が来ているんだから、そんな悠長なこといっとったらいかん！」って言った覚えがありますね。ちょうど私が 47 歳の頃で、一番熱かったんでしょうね、あの頃は。仕事もありましたが、本社会議があったときなんかもサボってました(笑)。

１月何日でしたか、（1999 年に埋め立てを）断念した新聞記事が出たときですが、私はあのとき「断念ってホントかなあ？」と思いましたね。辻さんはケロっと「保全できると思ってました」と言っていましたが、私なんかは実はすごく状況を悲観してました。名古屋市は埋め立てを止めないっていう感じでしたから、だめだと思ってましたね。結果的に守られてよかったです。この施設（藤前活動センター）もできましたしね。

■藤前活動センターを作るとき、たくさん議論されたと伺っていますが・・・。

活動センターを作るときでも、環境省さんとはやりとりが侃々諤々あったんです。環境省さんにやりとりの記録が残ってるらしいですが、かなり無茶を言ってたみたいですね(笑)。

当初、２階建てにする計画だったみたいですが、２階の高さだと堤防があって建物の中から干潟が見えないですから、この建物を３階にすることにすごくこだわりました。「あなたたちは大人目線で建物の高さを言うけれど、ここ来るのは子供さんが多いんだから、子供さんの目線で考えないといかん」って環境省さんに言った覚えありますよ。大人と子供の目線じゃ、少なくとも数十 cm の差がありますから。辻さんと佐野さん（藤前干潟を守る会）と私との３人で藤前活動センターの当時の隣の建物を上がってね、同じレベルでだいたい見て、ここから何 m 先まで見えるか見てみた記憶があります。結果的に３階建てになり、結構高くなりましたね。それで、南陽海岸堤防が改修される前は、藤前活動センターの３階から子供の目線で 70～80m 先から見えてたはずです。他にも、地面に埋め込まれてる黄色いタイル、目の不自由な方の誘導サインでも文句言いましたよ。でも、稲永のビジターセンターや藤前の活動センターが出来て感謝しています。

ラムサール条約湿地藤前干潟　藤前活動センター

■藤前干潟に対する想いを伺ってもよろしいでしょうか？

藤前干潟には、残されたからこそ多くの人に来てほしい、という思いがあるんですよ。藤前干潟協議会で、藤前干潟に面する堤防に小段を作るかどうかの議題が出たとき、作るのに結構反対意見がありました。私は多くの人が藤前干潟に来て、リピーターもたくさん来てほしいと思ってるんです。小段があればすごく歩きやすいし、干潟に近くなりますから、小段を作るのに賛成したんですよ。あまり来る人を制限すること自体好きじゃないんですね。来てもらったら極力干潟に入ってもらいたいですね。干潟への立ち入る範囲は、ある程度ルール化して、「これ以上行かないでね」、と言えばいいと思うし。尾瀬（福島県・新潟県・群馬県・栃木県にまたがる湿原）なんかは、人が歩ける木道がちゃんと整備されて、行けるとこは決まってて、自然にそんなに負荷はないと思うし。藤前でもそうなれたら一番いいなぁと思ってますけどね。尾瀬も四季で違うじゃないですか。藤前は、今は夏だから鳥たちはあまり来てないですけど、四季によって来る鳥は違うし、その良さがあるんですから、一度来た人にはまた来てもらいたいですね。

南陽（藤前）海岸堤防の小段

それと、今日も藤前活動センターの前をごみ収集車がたくさん走ってますけど、藤前干

南陽工場で処理中のごみ

潟は処分場の埋め立てから守られた干潟だということをたくさんの人に知ってもらいたいですね。意外と干潟だけに目がいっちゃってますが、我々の出しているごみがちゃんと南陽工場で処理されていることや、ごみをどれだけ出しているとかを見ていただくには、南陽工場のある藤前は良いところだと思うんです。今の南陽工場長になってから、３年間続けて藤前干潟クリーン大作戦の日に合わせて南陽工場の見学会をやっていただいています。干潟に清掃に来ていただき、今のごみの現状をみなさんに知ってもらうのも大事だと思うし、それを継続していけるといいなと思うんですけどね。干潟の清掃だけして終わりっていうのはさびしいところがありますから、せっかくだから一時間ここ（南陽工場）を見学してもらえるといいなって思っています。

■藤前干潟クリーン大作戦に関わられた経緯は？

私は第３回のクリーン大作戦くらいから参加してたと思うんですけど、その頃はメイン会場の導流堤じゃなくて、藤前海岸の清掃に来ていたんです。クリーン大作戦の立上げに関わった辻さんがいろいろ忙しくなって、辻さんから「掃除は坂野さんの担当だね」という話があって、クリーン大作戦の会合とかに私が行くようになったんですね。

クリーン大作戦実行委員会の委員長になったのは、他の方が仕事や立場の都合上、私を立てやすかったんじゃないかと思ってるんです。たぶん私が地元で民間人でしょうから(笑)。それに、私はいつもイエスマンですから、みなさんもやりやすいんじゃないですかね(笑)。

そういえば、谷津干潟（千葉県習志野市）のごみをひとりで拾い続けていた森田三郎さんのお話「干潟の泥んこサブ」っていうのにも影響を受けましたね。息子がこの本を持ってたんで、私も読んだんですよ。どんなことでも継続っていうのは大事だなぁと思いますね。

藤前干潟クリーン大作戦　中堤（導流堤）会場

今、クリーン大作戦と合わせて行われている港区の「みなと川まちづくりを考える会」の清掃は、もともと庄内川の流域の学区が参加してたんですけれど、最近は、新川側の南陽学区も入って、その上流の福田学区も清掃に入っていただきました。たまたま私は、南陽学区の保健委員もやってるので、南陽町の地域を重視していて、クリーン大作戦の日は南陽大橋のところの清掃に行くようにもなりましたね。最近のクリーン大作戦

の日は、私はまず南陽学区で清掃やって、その後中堤（導流堤）に入るっていう感じでやっていますね。藤前海岸の担当は藤前干潟を守る会の人にやってもらっています。

クリーン大作戦にはたくさんの企業さんが参加してくれるようになりました。ごみを拾ってくれる人に悪い人はいないと思ってますから、どんどんその輪を広げていけるといいですね。

藤前干潟クリーン大作戦に関して、人とのつながりが増えてくるのが大事だと思ってるんです。最近、「どこどこの企業の誰々ですけど」って言って、クリーン大作戦に参加したいという連絡を頂くんです。そうすると、必ず連絡をくれた人のとこへ行くようにしているんです。まず藤前干潟のパンフレットを持って行って、クリーン大作戦はごみ拾いが目的なんですけど、干潟のこういうところも見てくださいとか話もして、私自身が営業マン的に動いてるんです。

私たちが最初の頃は導流堤を勧めてたのもあったからかもしれませんけど、メイン会場の導流堤に行かれる方が多かったんです。今はまず最初藤前会場へ来て下さいと極力ご案内してます。ここは藤前活動センターがあるので、水もあるしお手洗いもあるし、事故の確率も減るっていうことがありますからね。そして、いったん藤前に来られたら、次回はメイン会場（導流堤）へ行ってくださいとご案内しています。導流堤は、ちょっと不自由さがあるかも知れないが、あいち防災リーダー会のご協力で防災訓練の一貫で行われている炊き出しで作っていただいたシシ汁（猪の豚汁）とおにぎりもあるし、清掃後の干潟観察会も環境省の皆さんにちゃんとやってもらえるし、楽しいよっていう話をさせてもらっていますね。導流堤と藤前海岸の両方の藤前干潟を見ていただきたいっていうのもあります。

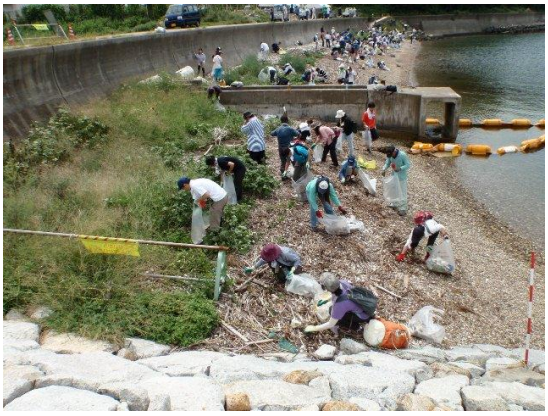
クリーン大作戦後の干潟観察会

クリーン大作戦の清掃後に導流堤で行う干潟観察会は、私たちはすごく大事なものだと思っています。参加されるのは子供さんが多いと思うんですけど、干潟に入るとみなさん喜んでるじゃないですか。今の子供さんたちは生き物に触れたりとか干潟に入ったりしてないというのもあるんでしょうけど、干潟に入る前は渋っていたのに、いざ干潟に入ると生き生きするんですね。そういうのをみると感動ですよね。子供さんたちには、そういうのをどんどん体感してもらいたい。小さな命のつながりを見つけて欲しいです。

■最近は藤前から伊勢湾流域に活動を拡大されているようですが。

流域のつながりも大事だと思ってて、「流域全体のゴミや水のことを考えるネットワークを形成する」ということを実行委員会の目的の一つに掲げてます。最初は野井（岐阜県恵

那市）だとか多治見（岐阜県）だとか、庄内川・新川の縦のラインしかつながりがなかったんですけど、今年から始まった答志島（三重県鳥羽市）の奈佐の浜清掃のおかげで四日市とかの横のつながりもできて、三重県と岐阜県とジョイントできるようになりましたから、いいことだなと思ってますね。伊勢湾流域としてつながっているんですから、このように活動が広がっていければいいと思いますね。



答志島奈佐の浜清掃

ただ、私は、その活動の中にも楽しみがないと、と思うんですね。答志島の清掃のときは楽しんでお伊勢さんの近くに行けるんだよ、というようにね。また、答志島のおいしいお土産を買える楽しみがあったり、私は答志島までの行き帰りの２時間半をどうやって楽しんだらいいかっていうのを考えてます。クイズを出したら面白いのかな、とかね(笑)。正解したら鉛筆１本とか思ったりしましたけど(笑)。

■ごみは過去と比べてどうですか？

私が小さい頃は、世の中にペットボトルや食品トレイみたいなプラスチック製品がなかったですから、ごみは少なかったでしょうね。時代背景が違うから。魚でも新聞紙で包んでた時代ですから。未だにそういう店もあるんですけどね(笑)。だから、ごみっていうごみはなかったような気がします。びんはちゃんと回収されてたでしょうしね。ごみがあっても分解されるようなものが多かったのかも知れませんね。今はプラスチックごみが本当に多いです。昔はあまり他のごみもなかったんじゃないかな。

ペットボトルは便利です。ちゃんと回収さえすれば、ペットボトルの使用は問題ないと思うんですけど。企業側に返しちゃうっていうふうにするのもありだと思いますね。今は、ペットボトルのお茶は余るぐらい手元に入ってくるんですよ。掃除したら１本、打ち合わせで１本、消費するよりも入ってくる量が多いものですから、結構たまって使わざるを得ない。ペットボトルは周りから供給されますから。そうすると使わないといかんとなって。それがいかんのですかね。買う側とすれば、ディスカウントショップで安く買えるし、飲みかけでもキャップができるという魅力もあるし、軽いし、割れない。昔は蓋をあけたら飲みきらなきゃいけない。ペットボトルは便利だから、ちゃんと資源として出して、リサイクルされればええと思うんですけどね。

少し前は、ごみが多かったです。今は、藤前海岸はごみが減りました。この１、２年前の南陽（藤前）海岸堤防の改修で、海岸の捨石が平らになりましたから、ごみも石の上に乗る形で、私もその場所に入りやすく、ごみを回収しやすくなりましたね。年２回行うクリーン大作戦の他に、地元の南陽東中学校の方も、必ず年１回ごみ拾いしていただきます

し、釣り愛好家のグループも必ず１回清掃に来ていただいてるんです。今は暑い時期だから清掃をやらないですけど、これから秋になると藤前は結構みなさん清掃していただきますからね。クリーン大作戦では、500 名くらいの参加があります。

■今後藤前干潟がどのようになっていくと良いですか？

最初申し上げたように、ゴカイが少なくなっているので、このままで大丈夫か、という不安はあります。最近はアナジャコ獲りの船が藤前干潟に来てますし・・・。

藤前にたくさんの人が来てもらうにも、生き物がたくさんいないといかんでしょう。それに、たくさん人が来ていただければ、皆さんの目があることになるので、アナジャコ獲りとかそういう無理なことが減っていくと思うんです。多くの人に藤前を知ってもらって、みなさんに関心を持っていただくことによって、藤前が継続してほしいです。

■活動を続けていく坂野さんなりのコツは何かありますか？

守る会なんかでもいろいろスタッフが関わったりしてますけど、私は「ケセラセラ」で、なるようにしかならんと思ってます。そのとき関わった人がしっかりやればいいと思ってます。藤前干潟は守られるべくして守られる状況、環境にあったんでしょうね。だからこそ、ちゃんとやっていかないと。今年でラムサール条約に登録されて 10 年になったんですね。藤前が愛されるようこれからも続けて行きたいですね。

今後も藤前干潟の環境は変わっていくわけですし、いろんな人が関わるんでしょうけど。ガタレンジャーJr.も中学生、高校生になってくと忙しくて活動が狭まっていくと思いますし、若い人は更に忙しくて関わりにくいんでしょう。でも、ガタレンジャーJr.の子たちが大きくなって、その子たちの子供さんが来てくれるといいなと思ってますね。

2012 年 8 月

聞き手：佐藤祐一（名古屋自然保護官事務所自然保護官）

野村朋子（自然保護官補佐）

坂野一博（ばんのかずひろ）

昭和 26 年 1 月 20 日、愛知県名古屋市港区小賀須生まれ。南陽地区在住。２代目藤前干潟クリーン大作戦実行委員長。